

本学における地理学研究所の「流れ」と河角さんの研究

一一一

吉越 昭久

私が立命館大学に着任したのは一九九五年のことで、その時河角さんは大学院博士課程前期課程の院生として在籍しておられた。河角さんはそこを修了後、大阪府文化財調査研究センターの専門研究員を経て大学院博士課程後期課程に入れ、二〇〇二年度に「宮都地域における古代の地形環境と土地利用の特性に関する研究―藤原京・平城京・平安京を事例として―」をテーマとする論文で学位を取得された。私の研究が河角さんに比較的近かったこともあって、その学位論文の審査を担当する一人になった。これらの経緯を通して、河角さんの研究を深く知り、それが私の関心とも近いことを再認識した。

本学の地理学研究には、歴史地理学（とりわけ考古学的手法を取り入れた環境変遷史などの研究）の明確な「流れ」がある。河角さんの研究は、その「流れ」を受け継ぎさらに新しい視点を加えた研究を展開したものであるとして高く評価できる。河角さんの博士論文の最も大きな成果は、完新世段丘の形成が宮都における洪水と関わっていたことを明らかにしたことである。この段丘の形成時期は10世紀末から11世紀初頭であったため、それ以前に宮都であった藤原京、平城京、前半期の平安京では宮都全域で洪水の危険性が高かったのに対し、後半期の平安京では安全な土地が拡大したことを示し、平安京の存続を議論する上で地理学だけでなく歴史学の分野でも大変重要な成果となった。河角さんの博士論文では、今後の研究の展望について若干触れている程度であるが、そこで対象にし

なかった日本や東アジアの宮都の研究を行い、都城の系譜を明らかにしたいという壮大な構想がみられた。またその展望の中で地形環境と人間活動との相互作用の研究についても、若干触れている。これらは、博士論文から論理的に帰結する研究課題といえることができる。その後、河角さんの研究は、長期的には研究の展望と齟齬はないのであるが、短期的にはかなり特化した研究にシフトしていったようにみられる。立命館大学では二〇〇二年度から21世紀COEプログラムや、二〇〇七年度からのグローバルCOEプログラムの採択を受けて、河角さんは京都の歴史GIS、バーチャル空間、空間データベースの構築などの研究に取り組むこととなった。その結果、このプログラムにおける成功は、本学のこの分野における評価を大いに高める結果となったことは事実である。河角さんのこれらのプログラムの研究は、将来の研究構想に深く関与していたとはいえないものの、プログラム研究の要請に応じて焦点を絞った研究成果が多くなったことも事実である。プログラムは異なるものの、私も同様な経験をしてきたために、河角さんの研究の「流れ」については大変よく理解できる。その一方で、プログラムの多くの成果は、河角さんの柔軟性や適応力の高さを示す結果になったことはいまでもない。

河角さんは、博士論文を執筆しながら構想を温めてきた歴史災害の復原やその応用の研究についても、これらのプログラムの実施期間やそれ

以降に学外の研究者と進めており、歴史津波などに関していくつつかの興味深い成果をあげている。もしそれが継続されていけば、河角さんの研究を特徴づける大きな研究の柱になっていったものと考ええる。このように多くの研究構想を持ちながら、それを実施できなかった河角さんの悔

しきは想像に難くない。恐らく、河角さんの研究に興味を持つ後進がこの研究を引き継ぎ、深めていくものと考ええる。本学には、そのような大きな研究の「流れ」があるのである。私は、それを信じてみたい。

(本学文学部特別任用教授)